

集団を活性化させるリレーション作り

井戸 仁(本学教職研究科准教授、学校心理学、理科教育学)

かなり昔の話ではあるが、今でも充分通用することなので、語ってみたい。

私が大学で、軽音楽部の部長をしていた時の話である。一年後輩で庶務と渉外を担当してくれていた中川君と鎌倉君が、私が部長を引退した後、部員たちとの会話で、こんなことを言っていたらしい。

「あの時は大変だったよな。井戸さんはいつも僕たちをこき使って、もうヘトヘトだった。でも、井戸さんは僕たちを必要としてくれた。僕らを信じて、いろんなことを任せてくれたのでやりがいがあった。突き放すんじゃなくて、いつも相談に乗ってくれたし、失敗したって『心配するな!何とかなる!』と言って別の方法を考えたり、いろんなところへ謝ってくれたりもした。

今の部長は、とってもいい人だし、やり手で何でもできちゃう人で、地元との付き合いも長く、いろんなことをそつなくやってくれる人だ。だから、昨年と違って、すごく楽し、暇になった。でも、なんか、僕らがいてもいなくてもどっちでもいいみたい。そんな感じさえる。

井戸さんと三人で一緒にリヤカー引っ張って、演奏会が終わってから照明器具を高校の演劇部に返しに行ったことがあるよなあ。俺らが軽トラックの手配を忘れていて、半泣きになっていたところ、『なんとかなる!』って言って、近所の農家のおっちゃんに頼んでリヤカー借りて、三人で汗だくだくになって返しに行ったよなあ。照明器具を返した後、帰りにおごってもらったラーメン!!うまかったよなあ。軽トラミスったのは俺らだったのに、『ありがとう』って言われて、井戸さんにおごってもらったのは、あれが初めて最後だったけどね。ほんまに!あんだけこき使って、ラーメン一杯だけかい!(笑)」

私は、一年間で部長を引退したが、彼らがいなかったら、軽音楽創立時のあの組織は維持できなかつた、今でも感謝している。

ここで言いたいことが、二つある。

一つは、中川・鎌倉・井戸の三人は同じ陣営を作っ

ていたということだ。「同じ味方同士じゃないか」という「われわれ意識」がそこにはあった。私の中に今でも感謝したい気持ちがあるということは、強い同胞意識や同僚性を持っていたことになる。その気持ちは伝播し、中川・鎌倉両氏にとっても、味方同士だという意識が芽生えていたのであろう。例に挙げたことが必ずしも適切だとは言えないかもしれないが、このような雰囲気やリレーションがあるという。小さな集団から、大きな集団へと繋げていくとリレーションは形成しやすい。

二つ目は、認められているという実感があることである。どんな人間でもナーシズムがあるから「君が必要なんだ!」というふうに、認められると元気が出てくる。少し話はそれるが、このことは、恋愛関係を築くときとよく似ているように思うのは私だけか?!

さて、以上のことをまとめるとこうなる。

自己肯定感を高めたり、教師間のリレーションを活性化させたりすることで、教師自身の自己理解を深めるとともに、同僚教師の理解も深めることができる。そのことにより、すべての教師にとって居心地の良い職場にすることも可能になるということである。これは生徒と生徒の関係、生徒と教師との関係でも同じことが言える。生徒同士、生徒と教師とのリレーションを活性化することで、お互いを理解し合い、居心地の良い集団になり得るということだ。

人間関係を円滑に機能させていくためには「感謝」し「ほめる」ということもポイントの一つである。でも、ほめ方の下手な人がいる。リフレーミング力が低かったり、その人の良いところを探すのが下手な人である。

また、時に劣等感の強い人もほめ下手な人が多いように感じる。劣等感が強いと引き下げの心理が強くなるので、どうしてもほめられないようだ。どんな人でも、良い面は必ずある。努力を惜しまず、良い面を探すことはリレーション作りの第一歩といってもよいのではなかろうか。